７　次の文章は『紫式部日記』の一節で、藤原道長の孫の「」（生誕五十日の祝い）の様子を記した部分である。よく読んで後の問いに答えよ。

〈岐阜大〉二〇二二年度出題

　の、「アあなかしこ、このわたりに、やさぶらふ」と、うかがひたまふ。源氏に似るべき人も見えたまはぬに、１かのは、まいていかでものしたまはむと、聞きゐたり。「の、かはらけ取れ」などあるに、の宰相立ちて、の大臣のおはすれば、より出でたるを見て、大臣ひ泣きしたまふ。中納言、すみの間の柱もとによりて、のおもとひこしろひ、聞きにくきたはぶれ声も、殿のたまはず。

　Ａおそろしかるべき夜の御ひなめりと見て、ことつるままに、宰相の君にいひあはせて、隠れ２なむとするに、に、殿の、宰相の中将などりて、さわがしければ、のうしろに居かくれたるを、とりはらはせたまひて、イ二人ながらとらへゑさせたまへり。「和歌ひとつづつうまつれ。さらば許さむ」とのたまはす。いとはしくおそろしければ聞こゆ。

　　３いかにいかがかぞへやるべきのあまり久しき君がをば

　「ウあはれ、仕うまつれるかな」と、ふたたびばかりせさせたまひて、いとうのたまはせたる、

　　のしあらば君が代のの数もかぞへとりてむ

さばかりひたまへる御心地にも、おぼしけることのさまなれば、いとあはれに、エことわりなり。げにかくもてはやしきこえたまふにこそは、よろづのかざりもまさらせたまふめれ。４千代もあくまじき御の、数ならぬ心地にだに、思ひつづけらる。

　「宮の、聞こしめすや。仕うまつれり」と、われぼめしたまひて、「宮の御にてまろわろからず、まろがむすめにて宮わろくおはしまさず。母もまた幸ひありと思ひて、笑ひたまふめり。よいをとこは持たりかし、と思ひたんめり」と、たはぶれきこえたまふも、こよなき御酔ひのまぎれなりと見ゆ。さることもなければ、さわがしき心地はしながら、めでたくのみ。聞きゐさせたまふ殿の、聞きにくしとおぼすにや、わたらせたまひぬるけしきなれば、「おくりせずとて、母うらみたまはむものぞ」とて、いそぎてのうちを通らせたまふ。「宮、なめしとおぼすらむ。親のあればこそ子もかしこけれ」と、うちつぶやきたまふを、Ｂ人々笑ひきこゆ。

（注）

　左衛門の督…藤原公任のことか。公任は歌人で、当時の文壇の重鎮。

　若紫やさぶらふ…『源氏物語』の主人公・光源氏の妻であるを意識して、たわむれに筆者に呼びかけた表現。

　三位の亮、かはらけ取れ…道長の発話。三位の亮は「侍従の宰相」と同一人で藤原実成。「内の大臣」である藤原公季の子。

　権中納言…藤原隆家。道長の甥。豪胆な性格の人として知られていた。

　兵部のおもとひこしろひ…兵部のおもと（中宮の女房のひとり）を無理に引っぱって。

　聞きにくきたはぶれ声も、殿のたまはず…聞き苦しいたわむれの声がしても、道長は口をはさむでもなく、なすがままにさせている様子を表す。

　宰相の君…紫式部の同僚。藤原道綱の娘。

　宰相の中将…藤原兼隆。道長の甥。

　御帳…御帳台。母屋に一段高く台を設け、四方に帳を垂らしたもの。ここでは中宮彰子の。

　宮の御前…宮さま。中宮である娘・彰子への呼びかけ。

　宮の御父にてまろわろからず…父を「てて」、自分のことを「まろ」と言うのは親密さゆえの、くだけた表現。

　殿の上…道長の妻・倫子。

問１　波線部ア～エの語句の意味を記せ。

◎問２　傍線部１を、わかりやすく現代語訳せよ。

問３　二重傍線部Ａ「おそろしかるべき」と判断したのはどのような理由からだと考えられるか。簡潔に説明せよ。

問４　傍線部２「なむ」について、文法的に説明せよ。

問５　傍線部３の和歌で用いられた技巧を一つだけとりあげ、的確に説明せよ。

問６　傍線部４を、わかりやすく現代語訳せよ。

問７　二重傍線部Ｂは、周囲の人々の、誰に対するどのような種類の笑いだと考えられるか。的確に説明せよ。

問８　次に挙げる作品を、成立したとされる時期の古い順に記号で示せ。

ア　更級日記　　イ　十六夜日記　　ウ　紫式部日記　　エ　土佐日記

【解答と採点基準】

問１　ア＝恐れ入りますが　　イ＝二人とも

　　　ウ＝ああ　　　　　　　エ＝もっともなことである

問２　Ａ紫上は、ましてどうしていらっしゃるだろうか、いやいらっしゃるはずがないとＢ思って、私は左衛門の督の言葉をじっと聞いている。

Ａ＝７〔「かの上」を「紫上（若紫）」として明示していることが必須。「いかで」「まいて」「ものす」「たまふ」「む」の誤訳や、反語が明示されていないものはそれぞれ減点２。〕

Ｂ＝３〔「私は」「左衛門の督の言葉を」という補いを欠くもの、「聞きゐる」「たり」の誤訳などはそれぞれ減点２。〕

問３　Ａ道長をはじめとする人々がＢ酔いに任せたふるまいをしていたから。

Ａ・Ｂの両方がなければ全体０。

Ａ＝５〔同様の内容であれば許容。〕

Ｂ＝５〔酔っ払っているという内容が必須。〕

問４　「な」は強意の助動詞「ぬ」の未然形。「む」は意志の助動詞「む」の終止形。

問５　「いかに」は、「五十日に」と疑問の副詞「いかに」の掛詞となっている。

前者は「五十日」だけでも可。後者は「如何に」などの漢字表記であれば「疑問の副詞」などの説明がなくても可。

問６　Ａ千年でも満ち足りないだろう道長の孫の末永いご将来が、Ｂものの数にも入らない私の心にさえ、自然と思い続けられる。

Ａ＝５〔「道長の孫の」という補いを欠くもの、「千代」「あく」「まじ」「行末」の誤訳などはそれぞれ減点２。〕

Ｂ＝５〔「私」という補いを欠くもの、「数ならぬ」「だに」「らる」の誤訳などはそれぞれ減点２。〕

問７　Ａ道長に対する、Ｂ孫の誕生に喜び浮かれて、酔い心地のなか自賛したり子どもを称えたりする様子を、Ｃあきれながらもほほえましく思う笑い。

Ａがなければ全体０。

Ａ＝２

Ｂ＝４〔傍線部を含む段落の内容が踏まえてあればよい。〕

Ｃ＝４〔「あきれる」などの否定的な内容と、「ほほえましく思う」などの肯定的な内容の両方が必要。一方を欠くものは減点２。〕

問８　エ・ウ・ア・イ

【現代語訳】

左衛門の督が、「問１ア恐れ入りますが、このあたりに、若紫はいますか」と、（几帳の内を）おきになる。（私は、）光源氏に似ていそうな人もお見えにならないのに、問２あの方（＝紫上〔若紫〕）は、ましてどうしていらっしゃるだろうか、いやいらっしゃるはずがないと思って、じっと聞いている。「三位の亮よ、をとれ」などと（道長様のお言葉が）あったので、侍従の宰相（＝三位の亮）が立ち上がり、（父の）内の大臣がいらっしゃるので、（父を敬って）下座から（道長の前へ進み）出たのを見て、内の大臣は（感動して）酔って泣きなさる。権中納言は、隅の間の柱のもとに寄りかかって、兵部のおもとを無理に引っぱって、聞き苦しいたわむれの声（を立てるが、それに）も、道長は口をはさむでもなく、なすがままにさせている。

　（私は、）おそろしいことになりそうな今夜の御酔い心地であるようだと見て取って、（宴が）終わるとすぐに、宰相の君と示し合わせて、隠れてしまおうとしていると、東面の間に、道長様の御子息たちや、宰相の中将などが入り込んでいて、騒がしいので、二人で御帳台のうしろに座って隠れているのを、（道長様は、隔てている几帳を）お取り払いになって、問１イ二人とも捕らえて（その場に）お座らせになった。（道長様は）「和歌を一首ずつ詠み申し上げよ。そうすれば許そう」とおっしゃる。（私は）わずらわしくおそろしいので（このように）申し上げる。

　若宮様の生誕五十日のこの日に、いったいどうやって数え尽くすことができるだろうか、いやできはしない。八千年にも余る、あまりに長い若宮様の御代を。

　（道長様は）「問１ウああ、（立派に）詠み申し上げたことよ」と（おっしゃって）、二度ばかり（私の歌を）声に出して口ずさみなさって、たいそう素早くおっしゃった（歌は）、

　（もし私に）鶴の寿命（すなわち千年もの寿命）があれば、若宮の千年の数も数えとってしまおう。

あれほどお酔いになっている御心地でも、（道長様がお詠みになった和歌は、若宮様のことを）お思いになったことの趣であるので、たいそうしみじみとし、（その御心も）問１エもっともなことである。ほんとうにこのように（道長様が若宮様のことを）大切に扱い申し上げなさるからこそ、（若宮様の）あらゆるめでたさもいっそうまさりなさるようだ。問６千年でも満ち足りないだろう（若宮様の末永い）ご将来が、ものの数にも入らない（私の）心にさえ、自然と思い続けられる。

　（道長様は）「宮（＝彰子）よ、（私の詠んだ歌を）お聞きなさるか。（このように）詠み申し上げたよ」と、自賛なさって、「宮の御父として私は悪くはない、私の娘として宮は悪くいらっしゃらない。（そなたの）母（＝倫子）もまた幸運があると思って、笑っていらっしゃるようだ。よい夫を持ったことだ、と思っているようだ」と、たわむれ申し上げなさるのも、この上ない御酔い心地にまかせたものであると見える。（道長様の酔態は）大したこともないので、そうぞうしい気持ちはしながらも、素晴らしいことだとばかり（思い申し上げる）。じっと聞いていらっしゃった殿の上（＝倫子）は、聞くに堪えないとお思いになるのか、（あちらへ）行かれた様子であるので、（道長様は）「見送りをしないと言って、母上（＝倫子）は（私を）お恨みになることよ」と言って、急いで（宮の）御几帳の内側をお通りになる。（道長様は）「宮は、（私がこのように几帳の内を通るのを）無作法だとお思いになるだろう。（しかし）親がいるからこそ子も立派なのだよ」と、ふとつぶやきなさるのを、人々は笑い申し上げる。